誹諧類句辨

863
180

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180

ガラス使用

863-180

誹諧類句辨 上

江戸 一陽井素外著

和露文庫

元禄乃頃宝晋斎其角ゝ門人ゝ句是事を
用ゆ趣意ゝ初学ゝ人又ハ遠鄙ゝ住者
ゝ為ゝ発句ゝ作ゝ時等類乃選ゝ道
あるべきゝ橋ゝ也是大番ゝ付ゝ所
詠ゝ歌道ゝ英雄ゝ中ゝ我国歌ハ詞を
用ゆゝ事ゝ新ゝ敷ゝ学ゝ人ゝ制乃詞
有用捨ゝ事ハ有ゝ連歌ゝ如ゝ不ゝ

就諧も式ハ連歌ハ少なくとも句作ハ己の思ひよる
所の趣向をとるこゝ古今ハ勿論古事古俗公事
俗語乃ゝ人ともに公の作法結びくいひ出侍るものゝ
何事も自由なきハ句作ハ意も作も一変く新さふ
他乃糟粕句ゝ面ふ有ゝ紀ゝ貫ゝ句ゝ事を
著そものハ中とあゝ世よとハあゝ沢ゝゝゝ
似ものの句ゝ作ゝ時絵のてゝ作ゝ等類となる
面きをとるゝ働きを見せ無也世ゝ雖論ふ
なゝゝゝ異ともいひ法へき句古今自拙ゝ者

連歌

鹿乃声絶ぬハ山や薄まゝゝ　宗祇

志ゝのゝ社ゝのゝかめやゝハまゝ吉し　乙由

涼伝南北新俳変化乃論ゝ句を連歌法

拙ひ法ふ思ゝ人ゝと志ゝゝ

連

ゝふのゝゝゝあゝゝ数ゝ銀漢　宗祇

世ゝゝゝゝ洩さゝ水ゝ天ゝ川　梅路

水ゝゝゝ中のゝゝゝ数ゝ鳥河のふ

のゝゝゝ世ふ時ゝゝ逢ゝ年ふ

一夜ゝゝゝゝあゝ人連歌ゝふ会ゝふ

連

年ぶりの春ゆく涼や家中吉 板河 宗牧

こゝ来しらゝかの小原ゝ中し 志 素堂

となりの門ゆくせもなかるる河豚小屋ゆめ

人〻夏籠きるゆめ夏の年忘れいかなる

立鶴乃羽風とまし夕早苗 宗因

涼み羽の涼夢ふくゝ夏木立 希因

岸川涼は羽風よ書を動のし新樹は清

風小緑金をゝ川世風情世人見をゝ

百ゆゝ共恨類俳諧将祖翁の名ゝ連歌

連

ゆゝ宗因と書ゝ俳諧は梅翁と云ゝ

世業は事小倣ふ

鳳凰と出よのとけ紀ゝ川世と 貞徳

風風と風風ゝさゝの羽く音書乃書 風虎

格物論小風は瑞夏乃ゝなら太平世ゆは則

ゝのゝゝゝゝゝのとけき業を事ふ聖代を

おゝゝきいさ紀よき書乃ゝ多ゝ静謐式

祝しのふ新歳の吟は新あゝき事ゆゝ

紅紫ゆく又芳をゝゝゝ少 貞徳

花をやる梅の蕾乃うき世をば　まて
花咲公羽八又の一字ふ裏表の錦を縫ア捨ハ
蕾ハとはふ仕多のくられき代志めを
おとろけ念佛畳堂節　季花　梅翁
寒中ハ多仏庶せと節　季人　林元
誹諧林祖師西国行脚の時姿句ふ独吟
しく釈教百負なる前ふ明く梓ふあ〳〵ハ生
称名念除ともをろ我しらめて　宝のことを乃ち
はくしけ海ち宿ふ宿ふ林元ハ寒中蕾年の

せをしきをかろ〳〵ものしを
お角力よ名のしを是ハ二所の関　梅翁
角抵とら乃名さうを誠く二所ら舞　榊居
二所ハ下毛陸奥乃場也かくを並く名のしを
俳ふ二所ら舞を名さうハ　ら也莫宮を
誠く又吋関ふ知を宮根大関とを　む分
ゆを名ふ

鴨乃御を係を　梅翁
ちを乃を御ハ紅葉ハ　む時　凉俳

祖翁ハ比論ハ業しく水上乃自在志うらみ法
有業かくとうらるあ〳〵涼師ハ浮沈よとまく
紅葉此花のなこのめをとゝむ
世此中〳〵蝶〳〵くとるまいかくもこのれ　梅翁
長生乃鶴〳〵ゆうまれきく此也　木兒
兩句童部の口まさゝふ寿きるの　祖翁
ゆうまの色かくるれ世ハ荘周の夢と　親雪ハ
業の沉ほひまく生の沉生ゆふ彭祖ら寿き
とも松ひまくうるあ

名所部　七堂伽藍ハ堂塔ゆうら　如貞
高ゆ七宝七堂伽藍ハ京ゆうら　芭蕉
如貞の句ハ高ゆ世と前書の句ゆ名所の
梅くかゝ〳〵ゆうくゆ式ゆ七堂ゆ九堂法
縁をもふくめ申とゆうゆう
かしく異よゆうら紅葉よかゆも　德元
の山ゆ見ゆ何乃香も羽　梅翁　貞室
德元のもゆハゆう梅のこと染とかゆく香の
なゆ式惜むゆ貞室ハ梅翁ハ法西ゆ

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』　請求記号 863-180　ガラス使用

初学の人世香とゆ恋へ梅の外よ又何乃
香をあらしむ

春雨やたゝくあやんめてゝきゝ門乃松　德元

神道や多てるふほんせんつの雲　意翔

忘翁句合巻頭ふ
風鈴軒と番ひく右を判乃詞よ若の句

神道やゝとゝいひく我玉乃風俗といとゝ

つ松やゝ乃かとれきゝゝあらはと彼ゝゝゝや

あやんめゝゝ紀とゝひく句なゝゝ人乃ふ香ゝ

狂歌別ゝゝふ俳乃仏仏花合勝

五月雨ゝゝ堤ゝきれ一つ乃北川　望一

涙河乃底ゝゝ世ゝさゝゝ乃ゝめ　德元

句當雨聲を聞くゝ堤ゝきれとゝゝゝ

隱士雨脚ゝ世ゝ底ゝ世ゝ歳乃

いつまゝのゝ（忠臣）月ゝ香ゝ

臺や瑠璃をゝゝゝ多ゝ世ゝ乃ふ　乃ふ吟

世ゝ乃ゝ乃ゝ世ゝゝゝゝ　蒼狐

かしこまりて物ひきうつす事なかれ秋乃叢を
出るより埋木秋乃叢句ひろまりぬるの
新ひろめ藻ーきく瑠璃ハ雲中花乃持ふ
本ゝ事ハ仮云かりうつし世とくも有へきまゝ
先師の相ふ保少人冷泉を伽せり賞也
傘乃下と晴間をしたつきあめ　玄砂
ひろ事事ゝせめて明ゝき傘ゝ　超波
玄砂の句ハうゝかさの下時やうふ寺ゆゝうり
超波の句をしせめくゝ祠形ふゆやあゝん

肩衣やのちゝ世かけくゝお霜月　貞徳
潜佛や侍乃世の中一柄杓心紙
貞徳ハ未来の礼を現世ゝ家貞の話を
のへゝ肩衣を身ゝ引ゝ句云ゝ心紙ハ
ほゝ系乃一柄杓ふ雅ゝ持ゝくゝん
同ゝく侍世をも形ひゝ二句なゝ也
かけゝの祠身形と軽重あゝ
冥ゝ梅乃小松ゝ墓を一ゝ　鬼貫
うゝひゝゝ勝ゝ墓ゝ縁の先　芭蕉

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180　ガラス使用

手毬唄の伺と共屋よりて毒をうめと
伝説と入多ハ伊丹の翁の自得の所也一句乃
格調発句形式にしてしかるべし解ふ毒
きる物不と時ふ和ふ春暖とするハ浜川乃翁の
眼を附る所ふ〳〵滑稽の風骨ふくいもむ

竈〳〵　鍋乃野見　むし猫乃毒　不ト
徒猫ふ棚ふ落をなへ　野　沾徳
竈ふ下の灰毛　棚　撰　丑　踏　つま　法　ふ
野ふ見ねこ　ふ　沾徳　この　換　渦　ハ　京　集せし

十めみ〳〵巣ふ〳〵ふ〳〵

元日も旅人を見る驛可那　沾徳
旅人や雑煮をふくみ歩行　仙窟
躍ふ弧形ふ〳〵ふ歩行みを〳〵き俳名
立月雨や湯乃樋外山ふ烟ふ見　莫角
答と這ふ温泉ふ煙ふ　ふ　津富
晋ふハ陰雲乃裏ふ外山の腰を回る湯の
烟を見定め津富ハ句を楽し沈めふ容法
流ふ出湯乃細きを見おふる

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180　ガラス使用

未だしかや未だ夜明ぬうふ雪法会　菊伍

五月雨やつゝ取初ぬ　松の月　蓼太

雪ちらしおとろ〳〵しき風の色と鶯先月を

降ふ姿月しぼりあの眼と熟むめ〳〵みる

蓼太八等類の句多しと従人名誹諧大節と

題して好この世一を見し事ありて発句多き

人ふ等類ふ亦多かるべし蓮二の古今称ふ

風雅八代乃ちとひ物ぬ詩歌を探むとふ

ひつゝぬとうれとふ事ふひふ事も多

うゝんと志ゝ世一実さる事れるむこう猥事ふ

類句と称ふ海きみ

紫人乃道〳〵ちかを紅葉ふ　勧楽

ひ秋世ちもつくこほもちふ　乙由

蓼を負へる山人乃家高きるみゝこふる

もちも類ふへし清きれるひ秋て亮

道〳〵風変ひるる

業世ちふ月乃白ひこの那　超波

八重きゝゝやふみ日と新きる　蒼柘

ゆふ九重の白ひハ手ゆてみいゆ（東都ふ
知らきこつらをとらるて
初しや腰ふりの重曳ゆ　挿屋
きりしたや足くゝ手の先る猫ゆ　曲菴
柳ふハ雪ふ夜寒をと知と曲公羽い寒さめふ
知やこうと芝ふらふ者し
うらひきるかのくゝとかの一字ゆ　古花籠
うらひきるのくゝとよ初音イ　蒼狐
かの一字三字松ふ山のれきい女歌のさらしる

いとゆを且この家と寒くよゝ課せるる乗し
古き代乃風体を見えり
紫かくきふ嵐嘯なり瓜ゆ　蒼狐
瓜乃紫よかくきふ嵐ふ　存義
けめて白ハ鶉嘯なるゆ祠とかゆくゝ寒
深草の紫うくきるゆ田嵐化為鶯清明の
候をおゝ乗し言外よ接ゆゆくとこゝ好み
白ハ嵐賊紫よかくれくゝ夜のゆく動き人を
巡きて消きけふ滄ふれる事

悟まとく帝燭けしさを秋乃風　心祇
紙燭〜く半ら冬の雪ちらつかきの風　樓川
是紙燭乃俤悟まと者くられ人ハ世代去と
なるうと尋ゑ一ひ人ハ齢今ハ旬と越ら
志ら雪ゑ月乃面の恩ハ世代際　心祇
名月や雪のうしかめ紫ちらさ　不言
雪ハ白世字一旬ふ満ち月ふ満ち月乃名
月ゑし名の字一旬と越ら雪よりも濃やゑ名
五布四布ゑの伊ゑうきや古蒲團　馬所

四布ゑ布みのうくき家世ふとんふ　存我
去旬三布と旬ゑとゑ去ゑるゑ古姫とん八時ふ
垢ゑとゑ伊ゑ旬歎しかく紫乃ふとん色
志ゑ伊ゑのなる歎と楽しとゑるみや
津ゑ常昇ゑると露の力ふ　津富
俳ゑ世ゑ世ゑ世

句鑑より入集

夕蛍や蚊もかくれの跡　花縣

蚊はらや其むしやくれの跡　二世　古簾

並縣は現在を業し古簾は旧跡を行ふ

うやむやいなむかふ　歌仙もとらく也

又一字をもつて多くは同業世句ひとりの真砂

かろうへ　ふるさと　いあらねとうへ　今年　億万法

風士公をよそ世服をとらむる亦なまは谷世居し

人乃うへ　ゆを　多く見え侍り

なたけよ　鹿ふ　ふをしかをと萩の坊　宗祇

ふけを　麻なの　次は　かは　代萩　ふ　貞徳

八幡乃武部郷貞徳の句を世くさまは

昔萩の坊ゆを宗祇乃句ふとされは

貞徳ふ人世ふりけまはとりはへ

八月十五夜　芭蕉仏

ゆを乗をいうあ　や山乃まうをまし　才磨

みをうをいかめ　山みをうを海し　其角

夕納涼よくろう男子十十重ねる　其角
夕ぬぎすてくも男ふらまれ申る　松濤

苗代をたくみる森ぬ烏この方　支考
なるこ子成こて拍子ぬ　いせめへ

續五論ニ西花坊ニ云せ狀句とおもしろせ
作るこ小始めハ拍子ぬ拍子ふ七文字なるこ
小一句ぬ苗代思ひ付ル百姓の作森の
一字を伸得ぬ烏の風流定まりれハ詩
発句とハ思ひ作ることれハ尾府小至一時乃

吟也ものハ伊勢ぬ人ハ苗代を一字も
あらしかるいハ作るとき計ハ我ハなと森法
一字小貴ぶうるもと風格を恨めきぬ有し
案ニ此句容易小等類あるべきもおかしき
伊勢ぬ人ハ何人ぬ西花坊ニ文面味ふ
早乙女やるぬ注うるへ植るゆく　葉捨
内をとめてるる乃なく方へらもて沢　希因
胡ニの保や出る此ぬ笠ぬ　宋河
あきうりや只ニのあよ實乃おはさ　存義

見いつまゝ印本にまさる白くとうとく[illegible]一ふ落
ゐるまゝ言ふ他は何とゆめく[illegible]
異門賢注に松河法師云歌は風雲草木に無ふ
打向しく業にへきゆめや古歌乃材木ゆく初めら
歌をよゆんとせむいへきおむ[illegible]但先達法
うふいもへるゐ他又よゆる姿詞見なるふむ者めて
古歌とし半ら〇乃作るへ一向ゆく用ゐるし
又物をんてる才豊ゆて詠ゆ事を共ゆるゆの
作るへきゆて天台よ間證禪師文字法師をとるふ

きへるこのゆし　止觀第五に間證禪師多增上慢
文字法師多推上位トヲ云ヒ
作るゆことゐ敬僧都云ゆるゆふ世人者ハ世の
自を八字ゆ二字ゆへくにふ八字作るとゆむ五字我拙
ゆしきまゆ志深き人乃まこゆ不ゆいひゆる
自し明日ハ必しゆくりてさゆ為くゆ乃作者作るゆら
不便の事也古人ハ大きてよいゆめ作るとゆむ
有家卿未ゆまゆやうにとゆさ事をゆさ
ねくゆ作経を足ゆの中や海をとゆさ作るをハ
其ゆの歌仙ゆ下ゆ事とて歌を思ひへるとなむ

香ふかくて花めも中るをいかしか
ちる紅葉をとゝ[illegible]

又云

[illegible]
梅のゝれ薫よりとゝ紅めもひか
伽藍ゝ[illegible]紅めの伽ゝ[illegible]不便の事也いとゝの
玄妙の句ゝ[illegible]伽藍ゝ[illegible]人のゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
人のゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
兼載云伽ゝ[illegible]

この[illegible]伽ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
伽藍ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
伽ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
宗牧云[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

業平歌ばかりあるべし海ゑんとまを、花のこゝろ
ばかりの歌なりやうなれども俳諧なる歌
歟まことに俳諧なるべしとある詞誠なるべし
平家記云上貢法印の詞ふる雨を天地よりあめ
よりあめにあらず雨と云葉を二度云て面白く
やさしくきこゆ我よりあめる歌なれども詞なり
よりまことのものなり

胡霜は雪とぞ見しの草葉哉

たまゝ我袂負也世時はめぐるはゆかしかきゆて

雪和りきゆとふ事ハ世ま紀也又昔ハ歌を五
事さへいとゝ也世まを紀ハ俳諧
なりかしなり事の頂上也高唐賦なる事ハ
俳諧といふ意なりと又詞とまとめく俳諧の
きゆなりとは扨詞を俳諧とまるべし大事なる
法口傳の文なり

木食上人無言抄ニ本歌取の事 詞をかへ事を
かへ古歌ばかりを詞ハ古く心ハ新
しくとあるべし云々誠よ者かりくれなる

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180　ガラス使用

但本歌とる事ハ古今ハ紀好あハ伝志のうらさるもの也

是歌連歌の道へ也 流儀ハ牧さるべき事

重頼 様ニ号雅舟 吹の早伝志の手古きこのうらき

なるハ所別さるといまさ弁なまめを伝さ大かさと

知るべ也白伝志事ハ先過去乃伝とをく

吟味あるべし世事ハ知さ紀人ハ万ひく等類と

道まさとハ人ハ義の伝志紀紫ハ言かへさ万ひまを

杜鵑ハ以書く世ハ詞ハ遠ハ也の一筋ハ徐

茶仲勧随筆ニ同意乃句有るハ多ハ

ハ流石ハ白崇ハ忠知ハ志ハ多ハ積る

雪ハ見さとハ伝例ハ事ハ也ト宮ハ先姫といふ

のひとりも延宮ハ おもさ夫婦とハ万ハ猫

知ハとハさ万均明ハ ハ是ハ先ハ也のとハ

このかさハ一人百ハ先ハ百ハ也ハ紀

頼ハ万かハ志ハ紀

業ニ忠知ト宮世ハ名参ハ伝者なハ先伝を

おハ生ハきハ万おハ之ハ句論茶仲名ハ万なる

ハとハ万ハ万ハ也し

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180　ガラス使用

先師曰白ハ題を得ハその詠物を眼前ニ見るごと
なるべきよくく見定め趣向とまりへき色面他を見
この人ゝ色詞を出すもの付ハ情ゝくたくさく生類
あるものゝ色と常ふかく主あさ行ゝ色ふも同類海
少人ハ白ゝ梅や自身乃とり合せ　梅前
桜移ゝ出ちゝるゝ人ゝ梅の香　素外
口ゝ出ちゝ富貴那もかゝ　郭ゝ貞助
かゝきゝ次雨ゝ出られ乃無古着　素外
早ゝ合ふ吾妹かけむまちゝ女郎　嵐雪

稲ゝ出ちゝ家ハ早ゝ出の活女郎　津富
ゝ出ちゝ家毎ゝ出ちゝ侍女郎　素外
虹乃根をかゝ出ちゝ中ゝ棟ふ　鈍可
おほゝ出ちゝ虹のゝ出ちゝ棟　素外
節乃ふ出ちゝ情あゝ出ちゝ古扇　馬肝
世ゝ出ちゝ乃ゝ出ちゝ乃女活者ゝ出ちゝ　不言
節乃ふ出ちゝ出ちゝ人ゝ出ちゝ古扇　素外

馬肝ハ市ゝ白ゝ色ゝ出ちゝ色ゝ出ちゝ不云ハ白色

三ゝ白乃稚新伝乃　十三夜　蓮之

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180　ガラス使用

みよりは法雅一の保あり十三歳　素外

春めくや小素八きくけの初梅　紹山

素外や小爽八年ふけの初ほとと　古蘭

爽のうちよりさくハきりうつ梅　素外

はるの句八世とせうむ五千堂　先師昌平

橋のみち小ふ行くと行ハむと柳塘を道ゑて

はるの素外　初め草色青く桃色黄ちる眼前の

緋小爽のうち小素八きくけの初ほとと　法

詞と得ゑ今ゑ文字外重ねめしたりーき

句ゑ外ゑ梅柳ゑ外はめ小ゑ素ハ草雑

小鳥外と打かくく重見ーこの貫代初梅小

遊ゑゑ八ゑ小し師ゑ外と八ゑきゑ雑ゑめゑりと

ゑゑ八自賛乃古ゑゑ句ゑゑりこの八次ゑ

いてゑゑふほゑゑめゑけーきゑ八ゑゑーこの毎ゑ今ーゑ

いてゑゑく句古今集巻頭小年の内小素八

きゑーゑとある代春の中小素ゑ世ー小今世八

ゑゑんの八と見ゑ文ゑ同集の代諧歌と見よ

杜ゑ小田代作ゑ世ゑゑゑ吉野と称ゑ紙

力の係き事と又紙屋の発句ハ山風とそゝく降
とゝ[illegible]しし去年[illegible]雪兼載乃発句ハ
[illegible]風ハ紅葉[illegible]神乃留ちゝ[illegible]へハ連歌
[illegible]初[illegible]
[illegible]句[illegible]ハ[illegible]
考[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]ハ[illegible]物語[illegible]ハ篠[illegible]
[illegible]ハ[illegible]初[illegible]
[illegible]句[illegible]ハ[illegible]
[illegible]発句ハ[illegible]古き連歌
連歌[illegible]ハ[illegible]
[illegible]句[illegible]奇也[illegible]
[illegible]師[illegible]判[illegible]感[illegible]
[illegible]古[illegible]
[illegible]

是等ハ中[illegible]

小あんん[illegible]さ[illegible]と[illegible]仏仏[illegible]かゝ[illegible]ひる[illegible]ハ色の白と[illegible]塗

かけ[illegible]ハ稿とたゝふけ[illegible]

仏より法名をうけ[illegible]又

う[illegible]を用ひ今宵こゝ[illegible] 立圃

う[illegible]を用ひ[illegible]なき世[illegible]と色さりゐ 芳重

うゝりし[illegible]新[illegible]今宵[illegible]日の光 昌意

[illegible]月夜の[illegible]く[illegible]ゆ 日能

[illegible]ハつ[illegible]出[illegible]ゆ[illegible]外[illegible]ゆ[illegible]

[illegible]る白貫頃[illegible]ハ風[illegible]

大雪[illegible]大[illegible]を[illegible]夜[illegible]の光 素外

[illegible]句ハ月[illegible]縁[illegible]白[illegible]

等類を通[illegible]

[illegible]ハ音ハ[illegible] 重貞

[illegible]の[illegible]郭[illegible] 素外

[illegible]ゆ[illegible]ハ音[illegible]

[illegible]句[illegible]音[illegible]

杜字ハ鉢[illegible]

[illegible]

春風[illegible]久[illegible]る水の月 大梅

つ松や雪ふり積りたるみうみより　素外

大梅八春風変水一時来の云よりて凍
解し水面より新久しくやうやく八月くふ
見る月ちらつく寒月の出ぬまきこゆ紀の亀

つ松よりうみ目とゝまる公地を貫屋よいひ
せうり月ふくしやうり神ゝ祠ゝ等しくし新ゝ
ゝるつみ陽ゝるゝ亀しやゝ

乎吟俳諧合判乃祠ふかゝまたちゝよ八郎のゝ橋乃
やうり古祠よりこゝ世せる附合なりて八ゆりあるものゝ

侍ゝるの腹ゝゝゝ八秀句なるまゝ八いゝゝひもよゝきとまふ
郭公ゝゝゝん何ゝ事ゝ弱ちゝん抜ゝ亦事ふよる
亀きゝゝ紅梅手句ゝゝ世ゝてゝ志のふ神農と
有しゝ句ふ七賢ゝゝゝひ梅ふ祠ゝあゝてゝと真ゝ主法
紅梅手句
俳主友仙
附句のひふ花ゝかゝ祠ゝゝゝひゝん八歌乃梅
あゝ祠ゝ盗むゝ等しゝかゝゝき也と故長頭ゝもゝのゝき

案ニ貫頃八寺祠の親句行ゝ事ゝ中忘乎句の用
捨も有しゝゝ今世腹ゝゝ事ゝ八毋立亀ゝゝ

右俳諧合八門生乃発起ゝゝ祇園の社奉納ゝ発句

附句也季吟自の判ふかうなる皆有

たかろや祇園もとくしみ出ぬ法の声

面白やきとんとくしの郭公

あかろや祇園林の秋の月

たかやしろ祇園を林は松の雪

四季四番あく三法ひいの員一法ひいの特也季吟

則祇園乃社産物あく諸ひひ無社ひ時の

事やもとおひいの出ひ四季物ひ皆、あかろきと也

自判より自句乃分得ひ成事伝例ひ分ふ土宮

侍ひ也玄旨古今ニ帖ふ内一下の句より上ハ句多く

よひひる句と又源順大中臣能宣世の中、ハ、なるみて

多とくむひひある方集ハ歌ハ上ふ物ひとよひ法ひけ

ひくるこひひ其の趣よりまきる歌又河伽藍倉下向の

時ハ月明ある人連歌の発句ハ乃ふ尼ハ

ひふかく秋のかきりてあふけ雪

と俗ひ今てひひりくこ百員引く習又下句とひる

けふ雪ハ又多ハひ一ふかなるより

かくく日歌ハ題を発句と連歌ハ発句と題目

世を経ぬ人は其時節よく多へ見へき事となむ

夢やゆめ一さんの乳まなかう百年を　梅翁

立やゆめ一さんふるまなかう百年を　仝

半時庵を東籬ふとしる時文章にはをを

偏らしめる日さいろう安けき黄鶏頭　洛々

半時庵に新更科ふるませ時と

重ねらはめ夏さいまし安れ黄鶏頭　仝

方と自ら一宮鶴ふ時くふ子まを有暑

又一雅雨用乃句とふ当ふ式連歌師宗祇法師と

義芳師の里へ用乃まはらふ雨今降出事

雲乃ほとしみて絶頂をまて

ふ〻と世ゆ月を暮ふ〻今宵ふ

又の秋し同しかよいみの林ゆ年よかまを法新

ふ乃れ〻を秋を

ふ〻と野の月ゆくもをしをふ

亭のあ〻不審を客答ふ母月ふ論野ふ青の

月光ふ〻ふ事ふ〻世ゆ皆曇ふ〻ふ也

陰時毎用ゆふ〻ふ奇作とふ〻ふ亀ふ置ふ

まもある楽門乃聲白ふ

ひとくさ(法)雨降ぬる皐月このふ

此吟都ふゆゑく時の人賞誉もる事限なきふし

賢盛ものの法師こころ情く思ふまほるく生つ称

計ふかるやうに連歌乃発句楽しく体ともなる所

右の句いかなる言ぞ得くしくと問侍るこの八

此ふと時間なく降続く物憂さのつまり、ぞ世乃

雨皆降ぬるもやとあひ侍といひしと也賢盛

さきハさいろとあひ軽よこの句ゆゑてこの人称く

人ぞ〳〵ふまもと少ふ見せのへよ必ものこころれのく

ろとく帰ら行也

春雨ふ寄をさりみ時間この乳

ひとくさの雨ぬるる沈くふ多ぬるふ

あとまる雨こ見ゆるハ皐月法ぬれ見人や

俳意乃不貴ものもゆ人の涙ぬる句ふ趣をかく

雨を見ぬるもの心ふ余情限なれ

又僧未ぬ本歌取の子井蛙物愚問賢注の類ぬ

ふまもく人ハ此品ぬと侍ぬ雪吟ふれ句と也

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180　ガラス使用

[illegible]

連　[illegible]

[illegible]人　宗砌

[illegible]鳥やいつのかぜ　素外

新古今

[illegible]山[illegible]

連　松[illegible]　宗祇

同　涙[illegible]　全

[illegible]　曾良

[illegible]　古祇

後拾遺

[illegible]袖[illegible]

連　[illegible]　宗祇

[illegible]　守武

[illegible]　昌之

五灯會元

落花難上枝破鏡不重照

連　種しある松とい[illegible]　宗鞍

同　[illegible]　紹巴

同　[illegible]　宗因

[illegible]　重定

松重賛

[illegible]ハ筆ハ[illegible]ハ松乃[illegible]　才磨

古今

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ

連

月[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]　宗艮

月

山や雪松[illegible]　紹巴

新古今

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]　素外

連

大[illegible]　宗因

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]　任口

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]　正頼

月[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]　素外

古今

大[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

連

山[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]　宗因

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]　重方

十五夜[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]　百菴

月

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]　梅翁

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]　維舟

[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]　山田女

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180　ガラス使用

古今
ものひとはゝめきいゝ人のゝえつゝん年とゝりセハ侍めさるまゝを
旅草
ゝふハ門乃松ハ我も見ぬさゝり屋敷　梅翁
英ゝ心丹ふ雲こゝろめゝくみかゝの夢　素外
高砂
あゝふ桐生乃松さゝうめてゝこゝろけき
浬槃會や春ハあとてゝ長徒義　後佳
笠むゝゝゝ爽乃ものゝゝゝ多ゝ　菊知
あゝゝゝゝゝ素の物ゝゝゝ濡て降　蒼狐
いせ物語
おきもゝゝゝゝゝ

連　さまくの世なき蚊の涙哉　宗牧
　　ゆふ〻の雨も降まぜ夏の月　山田女
　　古今
　　ゆきゝ人をとゝめ蚊のねを絶くゆふ〻ゆふ〻ゆふ〻

哀乃かなしきる人ふかきる話の詞書あるべし

折とけぬ雪とく深谷の底古く鶯　貞室

うちとけよ笠ぬるる云ふ太平の雪　素外

手うち白い業旦ふ業せ一かな

河武の松原あく

折むきて霧よりいるやうなる　空我

みやこの雪かくしむ朝かすみ　才麿

五月雨ふかくまるものや田乃橋　芭蕉

ふりつもるくれなゐの残せる雪　心祇

教のあらハ帖をなくらる年籠同舟　哉人

魚と教あるを笑ふ放生会　羅人

又法樂ゑ神佛乃句を立懐旧追善ふ其の人乃

句を書ちいき武を古人の句を採らるを書ふ

見せく掃掃れをなる年一句の

人麿社法樂

連

島かくき牧者明乃春新この宮　宗因

芝を一巻おのふかのくるを赤法し　宗鑑

明石住人所ふ

なとくらべもかのくとこのつ柿もぎ　貞徳

（古今）はのくと明石乃浦吐朝霧ふかくかくれゆくあとをしらぬかな

菅神法樂

連　少くとこのえぬ帯ハあしの紅葉ち　宗祇

日　其神乃手向とおもふもみちのぶ　昌琢

日　東風やけと思ふ梅ハ白しとう　紹巴

同御影角

日　然ハ紅葉ちるとも見ぬ富乃梅　宗因

攝籙天滿の社めて

なるみは津や神ハ吐ふく梅所　素外

増上寺蓮野の社めて

あるーこのアるて梅ハとるる一樽　仝

（古今）然ハ紅葉ちるとこのえぬ向山紅葉ハ神乃まゆみ

（拾遺）東風ふく白しとこせよ梅花あるーハとしまなるとまつ

連　觀世音法樂

只生のむ陰ふ叶ふ雪乃松　宗因

魚籃同

（新古今）多くらのめ我笠ニ為ハ鰹　平砂

生くらのめ三あもち京ハ我世の平ふこのんかきち京

京極黄門墓所めぐる

連

明けもし又いつの日か秋乃月　宗祇

棹うはてしいしの上今年これの後　素外

己が句は菜畑ばかりなるを

新勅撰

あけはなる秋ぬかるを思ひしかくるるとてきのこうは

同し藤森乃杉から高師の芳喧を思ひ出て

明石潟夜ふかしもや朝寒や　才磨

一つの潟一夜ふきうきを相寒哉

手ひかうら雨乃ふひをとをるく

世をうるも更小家紙の　芭蕉

袖宮箱根ゆ菴をし時

世小ぬるを文ゆ芭蕉此時雨ゆ　洛

連

世小ゆるも文小きくまれ中ゆ小　又見ゆ前吉野拾遺

御製世ゆるも更小時西乃屋ゆ小

名をきゝあ小菜畑ゆ　素堂

よくゆ見ぬ小菜ゆ植ゆ　芭蕉

日

名をきゝあ小菜花さく河ゆ

南の夜ハよ小ゆ月夜可面　其角

連

やこ乃松ハ松原さら月夜かな

菓といふ女法うひもむこの一ツ外 涼こ

酒一升九月九日はうひきく

菴寿月ハ武蔵屋うめ小酒こ無しく

躍き此御ゆめうく夜もそろ 素外

名月や池を巡りて終夜

清光小先師ハ嗟をおもふ

名月や上戸乃酔ふる待の夢 仝

名り法師ひのふを遠津浦

名ゝ法師ふるかねのこ忘

此外ハ類ゝ業せ一ハ好こあるべき也又同類と

いめくとして先哲の句小結ひあを毒ひむもふ

おきみもいのふ沢涼一ハ小かるを風の果なと

せ一ある同を情むべき也句忘ハ云楽の

拾ひ一句乃仕ミかゝり侍ゝハ梅ハ鶯あるもの鹿

等類の評ハいのゝすき也是倫ふ尽なるゝ似

半ゝ礼と初歩ゝ他の句小ゝ学ひ見え

人ゝ生涯貧窮とゝなきかるの也始めゝ

句の形ハこのゝゝ沢ゝ自ひるふを五七ふ

むかしひ師と生のむ方ゝ判詩を受給ふてや
功の積るふさうひ自拙と奇作も出格調もよく
なるものゝ也さてひ古人乃ゆえある句を題とする
はゝめふ亜谷乃時ゝ句を自然も情よ亜へて玄楽胎
換骨の語をこのらさるを仮ハ推敲よ者へ一家を
機変ふ趣ひ命一ゝ少ゝ先作ある詞を其作ふ
用ふ事なりのまゝ又新いへをとゝ新をもとめて異
やうふ走ゝ邪路よ陥入とれ(この事)

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180　ガラス使用

誹諧類句辨 下

江戸 一陽井素外著

題

梅に星

星とゝもなみくらうめの花　梅翁

天地乃ゑらかふや星と梅　栗堂

きゝ梅やかの〳〵星を明殘る　国字

白梅や新月よりの星ひかり　星映

いろめくはいとゝ思ふる梅乃肩　素貫

梅ハ翌ゑ月ゝ雨怪ゝ星ゝ夜　沾涼

梅に祭　酒くらも莫し　維舟
菜くらの焼ばかり

くもの巣や梅の中より山清水　呉朝
宗さまとりし菜の花　初梅　梅寿
菜ハまさ色まつのうり乃朝さくら　雅郊
菜くら猶しらくゝ岸の寺梅　素外
巻をよし菜ふ物まつハ山ばかり　婆百

待花に雨　素雨や巻まつ人乃ちまつ　貞室

あふ事を巻ひらひ乃夜半の雨　亀文
まれ也ふもとの音や雨の脚　冠車

待花ふ雨やまつさき　評加減　文東

桜に三日月　柳餐乃まねかたもの　季吟

素流く柳よくまゝこの乃月　水哉
もまこのくれよくや三日月柳　如錦
三日月ハ眠る夢の月ばかを　千雪
月巻く書柳青しこゝの夜　舟子
紫柳ふみ乃ゝ雨降ぬ書　花縣
松島に霞　伐衣の松しほ　西雀
さはをつゝ
雲島や東国一乃初かすみ　亀齢

きぬぎぬの一服よ雪の八ツ手あり　文雀
時うれ松を嵐吐く鴉千鳥　賓春
松ふるやしら風うきし沖の波　岩槻何来
京なつの春や扉をとつ鴉　鬼来

夕暮ノ鳳巾　夕くれの雲ぬきの才麿
雲やいらのかすみ
夕くれの雲ぬきのこゝろ風巾うらかる　素麿
かのくろむ巾乃花乃夕烏　素麗
蓴菜むる日和や帰巾花乃あるとも　素竹

蝶ニ駒　申く弱乃足ふまれる紙嘘ハ　不ト

遠迫よ白ハ牧乃蝶と弱　吳夕
嘘ハ輪ハ弱乃地ふの日和ハ　吳龍
きれの市よ嘘とるる弱ハ鞠　吳仙
花蓴菜胡蝶や弱乃手里とハ　木丹
蓴菜ハ市里も陣ゆく弱ハ嘘　紫蘭

雉ニ雪　多くひもとるの　轍士
雉ハ雪ハ重れうる素ハ　鸞里
雪とハく孝ハ乃雉子ハ　著存
雉の孝山田ハ清逝とや　其葉

降雪ふり雪ふり雪ふふ雑の中　羽刀百童

雪きえぬ師乃初笠よ紙ぬ鞋　木導花籠

燕に出女　出女の化粧乃ゆや花はなを

嘶ふく新緑ぬ住をめ必をめ女　眉山

出女よ軒乃ひさをあふ新　紙舟

燕を住ふむ巣きふ多ふくとめ女　羽刀素盈

梅に三日月　こうりの梅ふ不角
をうーきをつこうふ

雪白し梅も多ふふ言の新　涼山

きふふし梅もる風ぬみゥぬ月　松山

三日月乃眉ふ横新梅の笑こ　頃翁

こうりや梅ぬ笑ふきこ　兎曉

ふこりの入井や今を梅ぬあや　翠旭女

暮春、吉野　口くせのふ井ぬ法こ
きふ乃申ふくへ弘

義芳師や桜を惜む春を惜む　素琴

初春や弾る春楽を今法山　賀皇

春雪ぬ吉楼ハ笑ぬ新る鄉と　羽刀佐

吉殿ゆくことふやしふの河　上毛桐生田礎

行春乃雲あふ也ふ山　寶馬

雨夜ノ雛　物うりわらべ　雛の面売り　宗端

雛市や静ふる面の夜目遠眼　就昇

くめて酒雛を雨夜哉　素玉

張しぶ雨夜ぶるもなる乃新　瓢牛

雛ふ遊ふ面取や人ふ孫と云さ　麻布　素月

問ふ庫しふ云れる笑ひの雨ふ宵　雀子

寺ノ梅　古寺ノ角毎ノ梅　柳居　一水

梅古し寺ふ式部ふの名乃白し　其交

ちこ岩ふ寺ふ梅ふ梅並木　素芹

極楽ふ寺ふ梅ふ咲ふ古ふ世ふ寺乃面詰　十哉

梅咲ふ古ふ世ふ寺ふ梅ふ星霜古ふ乃寺　操舟

晩鐘ノ海棠　海棠ふ入相の古鐘　海棠ふ清ふ和ふ夕清ふ日　寛麗

鐘ふ寺ふ乃眠ふ乃ふ　宇外

海棠ふ寺ふ乃ふ清ふ　枝静

海棠や日ふ暮ふ乃ふ　久喜　雀舟

かいまふや入相ふ乃ふ　素元

櫻に虹　ゆうさくれの虹の　蒼松
夕虹やはらはらとおちる人乃息　公曳
人うせさうな山へ虹の橋　青羊
胡虹を夏を常ならやう櫻　吐鳳
かの色むめやあれ櫻ともし　古桂
虹ふきまきさうと晴く人の山　笠翁

杜鵑に水鶏　ほとゝぎす　宗鑑
くるれくよく知せうる親　龍文
案内をし秧鶏ふさせしかきぢ　龜齢

ゆ平ふの鶏を遅くほゝ鳴也　水哉
庭ぬる明ぬ時夜ふるれ郭公　文東
耳ほしの鶏のなくふかきぢ　鷺堂

吉野の櫻實　櫻の実ふく　一鐵
　　桜ちんより此ぢ

實ちあまき櫻此重乃より此今　素實
まけ色の種をより此の夏ふう　素麿
櫻を実ふちう風しう法山　素玉

舟に螢　ほたる　芭蕉
　　蛍おかしの乳

ゆ月の夜しふ此よ初螢　涼山

紫船をあとに浜乃宮の岸　山曳
雨横ふおもし横とまるかまる外　聲波
涼めとゝや火番ちらほらの舟　雀み
ふと出て井ゆくらあるやほたる時　田礎
興出栗苑に拾　拾おせ出さん　素山
きもちるや拾通さるる風ふくこと　素芹
ふけ〳〵乃かこうの山ひやもし拾時　素外
紅白を拾ふゆくるゝ山し出宮　青芝
苑葉時と拾を拾おもしけしの色　笠斎

拾忘て勿御きもし出宮青ゝ　志夕
納涼に鶏　ふと羽とあとゝ　沾徳
ゆく鶏やゝ夕きゝ
鶏乃聲間て奇特むゝ元納涼乃　呉夕
涼をとる服ふいさゝし鶏の得ゆ　亀仙
人ふ鶏ふこと拾ふ風きし　十哉
人涼むゝ雪の西風や鶏乃羽音　賤我
ゆき鶏乃雷やゝ森出下きゝみ　慮得
涼雨に日影　涼しさく夕立　去来
鶏乃雷抑ゝ　入日新
夕立乃雨抑ゝ　横日新　寛麗

夕ぐれたるのち塔乃揖日新　山鳥
中ごろを第ふ遠山日新　寶馬
白雨やかゝらぬ沖乃月ハ赤し　卜人
夕ぐれや雲さへ遥に照る日新　百桂

市中ノ夏月　市中ハ夏ものゝ初りを　孔兆

廓涼し月とゝもの初りを　仙翁
市中ハ柳乃ゝ涼しかりし　木丹
夏乃月照る市中を人の音　津宣
暑服を灯ハ涼風や宵の月　久喜輕舟

町中ハ乃ゝ菓子屋なるつのり　雀舟
毋子に蚊　子ゝなるゝ毋子乃ゝ　嵐蘭
毋ゝと抑ゝ蚊ハ乃ゝ　雅部
蚊ゝとなく蚊ハ乃ゝ家乃ゝ　吐鳳
大ゝ乃ゝく毋を乃ゝ蚊ハ命　舟子
言原麥秋　ゝゝかゝ言葉　氷花
言葉ハ麥を書　畑ハ乃ゝ　通來
ゝゝゝ色ハ乃ゝ　雀書　秋を　素人
今ハ乃ゝ眠し　書かつ唄の夢　ゝ香

畫虫絲に　蠅　蠅ハいとゝ眼ハ　子堂
ちらゝ名ハき蜜ハ

きけハ蜜蠟ハ蜜蜂乃ふるゝ云　一巳
百姓乃蜜蜂訓とも蠅乃中　津富
怪ハ糸ハ今蜜蜂ゝる平ハ蠅　常梅
吹ゝく蜂の蜜蜂ハ蠅乃ゝる　過橋
蠟ふるゝ蜜蜂ハ敵ゝ何万騎　宝馬

暑に雅子　員ふるゝハ絲　園女
なるゝハ暑ハ蜀

暑ハまけぬ敵ゝ雅子蜜蜂ゝ　冠車
ゆゝき昌ゝハ絲ちゝ法皇さゝ　如錦

松なるゝ蜂ハ乃ハ日の盛　素琴
暑き昌ハ敵ゝ和ゝ乃ゝ　呉仙
雅子ハ蜂ハ俺一昌の那　左簾

鶏冠に松　遠かさゝ鶏の尖　曲菴
添ゝ小雲ハ

松ゝ日乃鶏川ハ船　梅壽
鶏ゝハの赤鶏ゝ松ハ老ハ亀　芝縣
雲乃ゝ月ハなゝ夜ゝハ　素角

暑に柳　柳さく自由ゝ暑ゝハ　旧室
柴乃ゝ柳ゝ暑ハ　松山

落ちるを暑く尺積る事の外　順翁
寺門とて異世界に隔て柳陰　翠旭女
志らけなく異世界に成行く事哉　仙星
拝ませ新定まり一つ内うつる　久喜　玉園

灌仏に花　手ハ新のおもひ出せ仏生会　涼佛

法の新くもゝ仏世産湯哉　其葉
かけ中も産湯や法乃室の滝　宝春
著合せうれしく卯の法の花法堂　高岩　露水

懸に旅泉　懸ゆく所ゝ　蒼狐

霄〳〵や懸屋ふ所まる旅せうら　栗堂
懸ゆく〳〵旅泉うりや義濃迫江　龍昇
旅泉ハ懸屋と云と人乃力この面　花蓋
羽うちと樂し旅泉の懸ふ夜　下毛　真岡　梶水
かゝ法を八我家こ旅ふ旅せを　都奴雅

七夕雨に鵲　かゝ法ふ　守武
法の面ゝ河

かゝきこ橋ゝ雨夜をこのA定　彭室
鵲よ雨よ雨ゝ乃為　寛麗
かゝきよ雪きこ面ふ橋　宇外

鵜の羽かけ橋よりの絶入会と夜　寶春
星ふこのせかさるきなるハ月の宵　素外
松に揚燈籠　入日や松ふく揚灯籠　由平
松ふ夜毎嵐の揚燈籠　素琴
眼かなえけ雲々遠寺の揚灯籠　巴曳
山田祝ふと雲まハ松ふあけ灯籠　恭深
蕈特に鍋　草ふる渦先　松意
草特や天井をけの小渦さて　栗堂
雲けふる渦かるるめる小羊道　素玉

雲けふる先木の柴く渦ハ酒　素麗
秋空に富士　秋の空ふ不ふこと　卜尺
晴不盡や雲と眼ふ雲ふ　亀文
夕虹ふ不ふ深ふ秋ふ　冠車
秋ふ雲ふ富士ハ百里の外さを　涼山
大示良ふ紅葉　白ふ人もこの鬼貫外ふなる丸町
もふふふ家ふ鹿ふの鹿　眉山
新ふふ実青丹ふふ酒屋　吐鳳
再興の谷や紅葉ふ那ふの寺　校静

九月の霖覧　なりやの霖　春澄
長りや家侯乃うへ　初霖さめ　雅郊
霖ふるゝ家侯乃古月の眼乃秤　寶馬
長月は名ハ霖さめと老ゆ　笠翁
岩城の薄　浜城中は御さ　嵐雪
道ほうしさきハ浜乃糸薄　国字
奥見よと拓くや浜城は笠薄　文東
浜の孤裏ふきの拓くへ　魚淵
ぐう道ハ町も美濃也　青楚

落ふ小ぐ岩城の秋　紫蘭
月に舞　紙ま小ふ紙小見せう月夜新　素堂
詠ふ月や舞ふん新　亀齢
天人乃下界小舞ふ月今宵　素貫
かさを紙隈ふ月舞扇　鶴里
足ハ月ふ孫ふ老の舞　素角
舞人の望へを神ふ月　賀屋
秋乃角力　角力とる尚白なる秋は
寿ふ紙を角力ふ有秋乃雪　梅寿

服さ海ー や秋乃雪みを勝相撲　素芹
負角力笠をもらもしならけり　何来
夕雪やさゝやき角力きゝふ限　雀舟
中くきやなのくさる辻角抵　素登

水邊ノ鹿　水仙くゝ林くも　芳室
あるを鹿乃面

秋宮くゝりゝ鹿ゝ秋かゝ　青羊
雪ゝ麻乃趣かゝし跡川ゝ　千雪
振かゝる花のちかゝや川向　山鳥
田ゝ麻ゝ春遠のくゝや蔵ゝ　婆百

ゝ別ゝ涼ゝ小麻ゝ鹿ゝ春　素外

野宮ノ月　跡乃宮ゝ昔を乙由
ちゝ月の眉

野ゝ宮乃鳥猶ハ虫ゝ月の雪　呉朝
月ゝ乃ゝ黒木の弓ゝ井小紫垣　素鶯
露きゝれゝ月ゝ乃ゝ弓ゝ荒野乃ゝ　木丹
りゝやあらゝ秋や昔乃ゝ荒野の文　慮得
初ゝし世ゝ小ゝ野ゝ宮ゝ月夜　春波

下屋鋪ノ虫　ききくや買こと　紹波
当ゝ宮ゝ下ゝ中き

手枕ゝ小虫ゝ下ゝ屋ゝ　水哉

中ふかし　垣ゑ小草　ぬれやすし　錦
中ゆく藤葉　吉野路や　冬猫　花簾
伊達深草　中物　下やしき　紀　百桂
ぬしの　ふかき　侍　中さ　久喜　松岳
月に鹿　有や　麻を　馬光
伊勢　くもり
海ゆる　麻あり　月　月屋　京　一巴
屋ふ　白きゆり　新　星　鹿　芝水
白ゆき　今年の　秋も　月ふ　麻　ふ香
ゆ　人を　辞　の　仙星

藤ハかれ　のいろ　麻乃　帰月　夜　清富
暮秋　蛍　秋も　なきこのきり　心　祇
きり　決力　形　秋　著存
秋ふ　深く　新も　きり　兎暁
耳　雲　ふ　ちの　ゆる　瓢牛
若　雲　ゆ　秋も　ふ　麻布　恵月
秋や　を　乃　蟬　賤我
蟬に　礎　ゆ　蒼柘
礎　ゆ　ゆ　ふ
寒　紀　礎　影　音　土　吳夕

[illegible]ゝ摺雁むらふ夜ゝ　呉祐

[illegible]の白をむ[illegible]の妻　法縣

[illegible]ゝ旅寝　郁雪

[illegible]ゝ　悠

[illegible]ゝ　文雀

[illegible]ゝ　通来

[illegible]ゝ　吐鳳

郭公

[illegible]　貞徳

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東山落葉

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

歳暮に暦　暦うも紙ハ　惟中
書けるとも此意

皆花ハ伊勢くらもの来る古暦　星映
手ふ年ハ探疾きてもの古ふよみ　百童
咲や梅当中くしとふ初暦　常梅

桔梗に雇　郭公ハかきて伸を支考
なの形雇乃首

雇ひりく人月ハこの書也桔梗ふ　栗堂
群雇ふ土の光見早し桔梗原　仙禽
月と淋一桔梗ふ細き雫乃新　逸渕
雇小松菓ハ桔ふ路なるら　酉示

雇ひりし見るる桔梗乃土まり　人
裏に須講に鯛　史邦
いと鯛に筆を　史邦
こけるとすかる

小去めを法ふらる鯛や裏沢海　撫芳
手金ふ鯛乃鯛や裏沢海　洋富
鯛くりを人就去一裏日沢海　軽舟
魚ハ鯛須ハ就法裏沢海　雇舟
鯛市小躍る且ふ裏沢海　古桂

雪に厩　ちゆきや先　許六
厩ちゆきて初る
たこのあ一ひり厩ふ月毛雪乃巻　素玉

桐たつく雪の夜半　宝春
古殿雪ふる徑世のむらさき　素盛
うゝふ弱ゆゑ雪乃殿外　声波
雪の目や殿乃葉乃蒲団　操舟

雪に行燈　行燈の煙けぶり城人雪

行燈の灯ハ、ゆゝ雪燈籠　素貫
雪ハ間乃行燈雪一庭の雪　素磨
行燈ふ武蔵安道おもしおもふ雪　芝水
月燈の中分一宮乃雪明り　玉園

行燈乃灯も少しとけり雪こゝ　金露

川に木葉　名川やこの葉ハ惟然
流かゝる風の木ハ葉乃川　岩乃角
川岸や風乃こゝの葉ハ早瀬　冠車
流ーくや古ハ葉乃庭の浅瀬河　素琴
ゆゝもれくちくこの乃稲川　亀仙
河潤く堰ふゆゝく木ハ葉乃　岩規素云　素秋

氷に待春　智月氷ふ待る春あゝ

春乃月や水と戯ーる夏乃月　寛麗

氷柱を去れば水かめる見えぬ紙　素芹
春雨や池乃面に雫　治涼
生きたるのみを手に蛙　松岳
素風をうさぎと行く冬の氷　露水
冬籠に鐘　泊船の陸よりもの寂しき　希因
寒月こうと来る陸奥の冬籠　亀文
冬籠森よりの陸の眼かさ伸ば　亀齢
遠近小雨夜叉かねやの冬籠　九簾
凍る夢梅さく陸奥人の面こわり　素悠

みちのくの陸の夢みを冬籠　梶水
時雨に座頭　何人乃ものかたりぞ　蓮之
雲ぞうごうごうと行方乃捨夜叉時雨　呉夕
初しぐれ雲の陸奥今宵さぶし　素竹
夕時雨ゆくへ陸奥乃うしろ影　素梁
月に雲ぞ雲ぞよりそふ時雨　笠斉
夜や志くれ座頭ハ山の雲ぞ　下谷　素月
埋火に老　埋火乃年よりぬ　寥和
埋火やいつくに乃ぞ老乃智恵　雅郊

[illegible]ふ生まれて[illegible]乃命外　瓠舟
[illegible]や[illegible]の[illegible]の[illegible]　室馬

御[illegible]　拍子木　拍子木の[illegible]ふ　春来[illegible]川御

拍子木も[illegible]る音や[illegible]　文東
拍子木[illegible]　[illegible]中き　公佑
拍子木乃むつ玉川や　胡[illegible]　素人

初[illegible]松　[illegible]ふ　蒼狐
月あそ[illegible]や炭の雲

[illegible]や牧位を[illegible]　松乃至　彭室
小[illegible]　[illegible]　松　鷺里

[illegible]　松　霜　涼山
[illegible]や松[illegible]負乃[illegible]　公曳
[illegible]山ハ別[illegible]の松[illegible]　律富
[illegible]や風乃音　苑縣
初[illegible]乃松[illegible]　木丹
[illegible]　[illegible]　[illegible]　

863
180

14186

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『誹諧類句弁 2巻』 請求記号 863-180

ガラス使用